青年期の被害妄想と対人恐怖の発生の予測と予防の研究

丹野義彦　森本幸子　毛利伊吹　森脇愛子
佐々木淳　伊藤由美
（東京大学総合文化研究科）
坂本真士（大妻女子大学人間関係学部）
石垣琢磨（横浜国立大学教育人間科学部）

〈要旨〉

研究1では，縦断調査と階層的重回帰分析を用いて，大学生の被害観念と対人不安の素因ストレスモデルを因果的に検討した．その結果，被害観念では，4つの素因（ネガティブヒアリングボイス，聴覚の錯覚，怒り，恨み）において，対人不安では2つの素因（公的自己意識，自己に高い課題を課する傾向）において，ストレッサーとの交互作用が有意となった．すなわち，これらの素因の強い人は，ストレッサーを体験することによって，被害観念や対人不安が強くなっていた．こうした結果を踏まえ，素因とストレスを調べることによって，被害観念や対人不安の発生が予測できると考えられた．そこで，研究2では，予防的な介入が可能かどうかを探索的に検討した．被害観念の強い人に面接調査をおこなったところ，大半の人が心理的な介入を受けたいと考えていた．また，小・中・高校時代にいじめられた体験が大学生の被害観念に関係していることがわかった．

〈キーワード〉
被害観念，対人不安，素因ストレスモデル，いじめ体験

はじめに

引きこもり・いじめ・非行など，青年期の不適応が社会的な問題となっている．その原因を解明したり予防を考えることはきわめて重要である．われわれはこれまで大学生における不適応に関心を持ち，アセスメント法の確定，発生メカニズムの検討，発生の予測などの研究をおこなってきた．今回，本研究助成を得て，青年期の不適応，とくに被害妄想傾向と対人恐怖傾向の研究をすすめることができた．

本論文は4つの研究からなる．最初の2つは，被害妄想傾向と対人恐怖傾向の発生のメカニズムを予測的に検討したものである．後の2つの研究は，不適応の予防に関して探索的に調べたものである．

研究1：不適応の発生の予測に関する研究

最近の研究では，健常者でも精神疾患患者の妄想と類似する内容を持つ被害的な思考を持つ人が少なからず存在することが報告されている（Fenigstein & Vanable, 1992）．これを以下被害観念と呼ぶことにする．また，対人不安傾向も多くの学生が悩んでいる問題である（丹野・坂本，2001）．しかし，被害観念や対人不安傾向をどのようにして持つのか，持つようになったきっかけはあるのかなど，そのプロセスについては，ほとんど研究されておらず，不明瞭な部分が多い．被害観念や対人不安傾向がどのようにして発生するのか研究することは，予防や介入という点から考えても大変重要である．

われわれは「素因ストレスモデル」にもとづいてこれらの発生を考えた．これは，一定の素因（脆弱性）を持つ人が，強いストレスを体験したときに精神病理を発症するという考え方である．精神分裂病や抑うつの発生についてはこのモデルで考えられることが多い．本研究では，被害妄想傾向と対人不安傾向について，どのような素因を持つ人がどのようなストレスを体験したときに発症するのか予測的に調べてみた．

1－1．被害観念の発生の予測

方法

大学生1・2年生117名を対象とする質問紙調査を3回実施した．調査間隔は2週間である．第1回調査では，素因を測定した．第2回調査では被害観念を測定した．第3回調査では，被害観念と，第2回から第3回の間に体験したストレッサーを測定した．

素因の候補としては，先行研究を参考にして以下の４尺度を用いた．①幻覚類似体験尺度（AHES：丹野・石垣, 1998），②パラノイア猜疑心質問紙(PQS: Rawlings & Freeman, 1996)，③評価的信念尺度(EBS: Chadwick & Trower, 1996)，④自己標的バイアス尺度(SATBQ: Fenigstein & Venable, 1984)である．なお，AHESは 10 下位尺度からなる．すなわち，入出眠時幻覚，アルコール・薬物による幻覚，ポジティブヒアリングボイス，ネガティブヒアリングボイス，聴覚の変調．聴覚の錯覚，創作時の自生思考．テレパシー体験，実体意識，身体感覚の変調である．PQSは4下位尺度からなる．すなわち，猜疑心，怒り，不信感，恨みである．EBSは 3 下位尺度からなる．すなわち，「他者から自己への否定的評価」，「自己から自己への否定的評価」，「自己から他者への否定的評価」である．したがって，合計 18 下位尺度を用いた．ストレッサーの測定には，大学生用生活体験尺度を用いた．被害観念の測定には，被害観念尺度（丹野・石垣・杉浦, 2000)を用いた．

方法の特徴：通常の横断調査では，素因と精神病理の相関関係しかわからない．本研究では，縦断調査によって，因果関係に踏みこむことを試みた．あらかじめ第1回調査で素因を調べることによって，その後どれだけ精神病理が上昇するのか，精神病理の発生を前方視的(prospective)に調べることができる．また，あとでストレッサーを測定することによって，ストレッサーの有無を独立に調べることができる．こうして例えば，素因の高低とストレッサーの高低という２×２の要因配置の実験に準じた検討が可能である．

分析方法：分析には，階層的重回帰分析(Cohen & Cohen, 1983)を用いた．従属変数は第3回に測定された被害観念である．重回帰分析に投入する変数の順序は，まず共変量(第2回に測定された被害観念)，続いて素因とストレッサーの主効果，最後に素因とストレッサーの交互作用(両変数の積)とした．つまり，第2回の被害観念を共変量とすることによって，第2回と第3回の被害観念の増加量を検討する．また，素因とストレッサーの主効果と交互作用の分析は，2元配置の分散分析とほぼ同じものになる．この場合，分散分析は連続変数をカテゴリーに分けて分析しなければならないのに対し，階層的重回帰分析は連続変数のまま扱うことができ，情報のロスがない点で優れている．

倫理的配慮：本研究のすべての調査は被験者の自由意志で協力を求め，協力を同意した者のみ参加した．倫理的な配慮から氏名を記入することは求めなかった．縦断調査なので，個人データをつなげる必要から，各自に一貫した暗証番号を設定させ記入してもらった．また，調査の全体的な結果は，ハンドアウトとホームページを用いて参加者に伝えた．希望者には調査結果を個人的に開示し，同時にカウンセリング的な心理相談にも応じた．

結果

18の素因変数と被害観念の相関を検討した(表1)．ほぼすべての素因において，有意な正の相関が得られた．つまり，それぞれの素因と被害観念との間には何らかの共変関係があることが示された．

表１　素因変数と被害観念の相関係数

尺度	下位尺度	被害観念との相関係数
AHES	入出眠時の幻覚	0.39**
	アルコール・薬物による幻覚	0.35**
	ポジティブヒアリングボイス	0.39**
	ネガティブヒアリングボイス	0.49**
	聴覚の変調	ns.
	聴覚の錯覚	0.40**
	創作時の自生思考	0.33**
	テレパシー体験	0.54**
	実体意識	0.33**
	身体感覚の変調	0.28*
PSQ	対人猜疑心	0.40**
	怒り	0.35**
	不信感	0.34**
	恨み	0.47**
EBS	他者→自己否定的評価	0.52**
	自己→自己否定的評価	0.35**
	自己→他者否定的評価	0.37**
SATBQ	自己標的バイアス	ns.

* p<.01　** p<.001

AHES：幻覚様体験尺度（丹野・石垣, 1998）
PQS：パラノイア猜疑心質問紙（Rawlings&Freeman, 1996）
EBS：評価的信念尺度（Chadwick&Trower, 1996）
SATBQ：自己標的バイアス(Fenigstein&Venable, 1984)

つぎに，階層的重回帰分析を行った．その結果，幻覚様体験尺度の「ネガティブヒアリングボイス」と「聴覚の錯覚」の下位尺度において，素因とストレッサーの有意な交互作用が得られた．この交互作用の内容を示すと図1および図2のようになる．

この図の縦軸は，被害観念の変化（残差得点の変化量）を示しており，横軸は，ストレッサー得点の高・低を示している．図より，「ネガティブヒアリングボイス」と「聴覚の錯覚」が高得点者は，ストレッサーを多く体験すると被害観念が上昇するのに対し，低得点者はストレッサーを多く体験してもあまり被害観念の変化はみられないことがわかる．また，パラノイア猜疑心質問紙の「怒り」と「恨み」の下位尺度においても，素因とストレッサーの有意な交互作用が得られた（図3および図4を参照）．

この場合は，高得点者はストレッサーを多く体験すると被害観念が上昇するのに対し，低得点者はストレッサーを多く体験すると被害観念が減少する，つまり被害観念をもちにくくなるということがわかった．こうした結果から，これら4つの下位尺度が被害観念の素因と考えられる．

考察

交互作用が有意となった4つの素因については，被害観念の発生に関して因果的に素因として関与していることが明らかになった。したがって，こうした素因を持つ人は，ストレスが高まったときに，被害観念を発生すると予測することができる。逆に言えば，こうした素因を持つ学生に対して，ストレスが高いと被害観念を持ちやすくなることを教えることによって，被害観念の発生を予防することができるかもしれない。こうした可能性については，研究2で探索的に調べた。

今回用いた素因の大半で，被害観念との有意な相関が得られた。しかし，素因ストレスモデルは支持されたのは，そのうちの4つの素因についてであった．素因ストレスモデルが支持されなかった素因に関しては，被害観念の素因というよりは，被害観念をもつようになった結果として生じた可能性が考えられる．

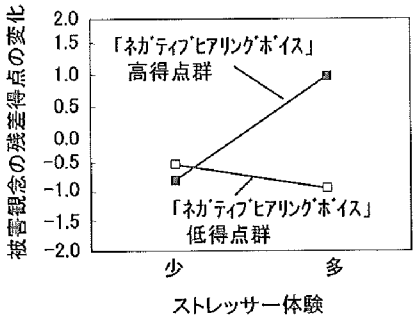

図1 「ネガティブヒアリングボイス」とストレッサーの交互作用

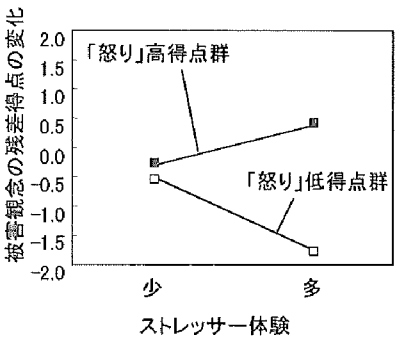

図3 「怒り」とストレッサーの交互作用

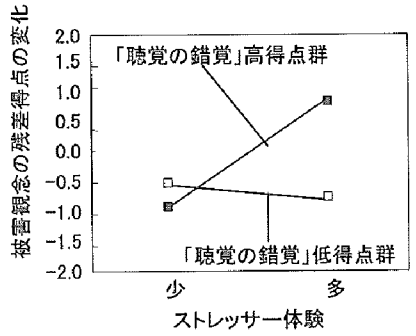

図2 「聴覚の錯覚」とストレッサーの交互作用

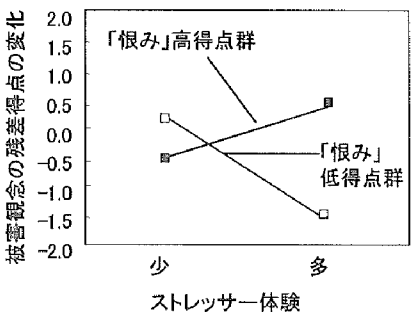

図4 「恨み」とストレッサーの交互作用

1－2. 対人不安の発生の予測

つぎに，同様の方法を用いて，対人不安の発生メカニズムについて，予測的な研究をおこなった．

方法

大学生1・2年生を対象とする質問紙調査を2回実施した．調査間隔は2週間である．第1回調査では，対人不安とその素因を測定した．第2回調査では，対人不安と，第1回から第2回の間に体験したストレッサーを測定した．

素因については，先行研究を参考にして以下の5尺度，12下位尺度を用いた．すなわち，①気質性格質問紙(Cloninger, 1993, 木島ら, 1996; 4下位尺度:新奇性追求，損害回避，報酬依存，固執)，②自己意識尺度(Fenigsteinら, 1975; 2下位尺度:公的自己意識と私的自己意識)，③自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)，④拒否回避欲求尺度(菅原, 1986)，⑤完全主義尺度(桜井・大谷, 1997; 4下位尺度:完全でありたいという欲求，自分に高い目標を課する傾向，ミスを過度に気にする傾向，自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向)である．ストレッサーの測定には，対人関係ストレス尺度(渡辺, 1997)を用いた．対人不安の測定には，相互作用不安尺度(Leary, 1983)を用いた．

結果

分析方法は研究1－1とほぼ同じである．階層的重回帰分析においては，第2回目の対人不安を従属変数とした．投入する変数の順序は，まず共変量(第1回に測定された対人不安)，続いて素因とストレッサーの主効果，最後に素因とストレッサーの交互作用(両変数の積)とした．

階層的重回帰分析の結果，公的自己意識尺度と，完全主義尺度の「自分に高い目標を課する傾向」下位尺度において，素因とストレッサーの有意な交互作用が得られた．この交互作用の内容を示すと，図5および図6のようになる．これらの図より，公的自己意識または「自分に高い目標を課する傾向」が高い群は，ストレッサーを多く体験すると，対人不安が上昇することがみてとれる．

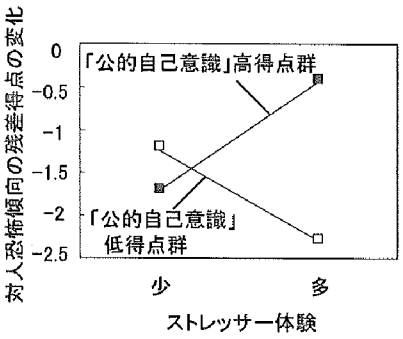

図5 「公的自己意識」とストレッサーの交互作用

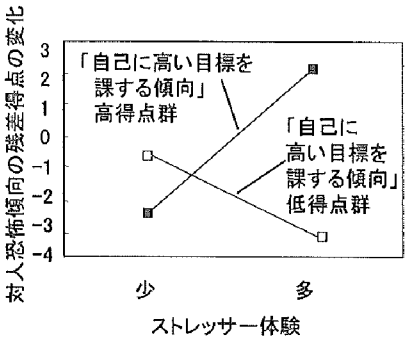

図6 「自己に高い目標を課する傾向」とストレッサーの交互作用

考察

対人不安の発生についても，2つの素因は，因果的に確かに素因として関与していることが明らかになった。こうした素因を持つ人は，ストレスが高まったときに，対人不安を発生すると予測することができる。こうした素因を持つ学生に対して，ストレスが高いと対人不安を持ちやすくなることを教えることによって，対人不安の発生を予防することができるかもしれない。

研究2: 不適応の予防についての探索的研究

2－1. 面接調査

研究1で示されたように，被害観念では，4つの素因(ネガティブヒアリングボイス，聴覚の錯覚，怒り，恨み)において，対人不安では2つの素因(公

的自己意識，自己に高い課題を課する傾向）において，ストレッサーとの交互作用が有意となった．すなわち，これらの素因の強い人は，ストレッサーを体験すると，被害観念や対人不安が強くなると予測できる。逆に言うと，こうした素因を持つ学生に対して，ストレスをモニターさせたり，ストレスが高いと被害観念や対人不安を持ちやすくなることを教えたりすることによって，こうした不適応の発生を予防する可能性がある。そこで。研究2ではこうした可能性について探索的に調べてみた。研究2－1では，面接調査をおこない，素因ストレスモデルを確認するともに，心理面接などの介入を行うことが可能かどうかについて調べた．

方法

被験者の選択は，研究1－1の被害観念得点が平均点以上であった学生に対して，面接を依頼した．その際，なぜ自分が呼ばれたのか，自分がおかしいから呼ばれたのではないかといった不安感を抱かせないように，細心の注意を払い面接に関する説明を行った．最終的に面接参加に同意してくれたのは5名であった．面接では，まず最初に，プライバシーを厳守することを約束した．そして，面接の主旨やなぜ面接を依頼したのか説明を行い，面接参加への意志を再度確認した上で面接を開始した．

結果

1）どんな内容の被害観念をもっているのか？

一番報告が多かったのは，「誰かに自分の気持ちを読まれてしまう」という考えで，その他では「誰かに悪口をいわれているのではないか」という考えであった．どうして「誰かに自分の気持ちをよまれてしまう」と考えてしまうのかという質問に対しては，自分が単純だからといった理由や，好きな人の前では自分の態度がぎこちなくなくなるからといった理由など比較的病理性を感じさせない理由が多かったが，「誰かに悪口を言われているのではないか」の理由としては，クラスの人の態度が冷たい，よく人を傷つけてしまうから人から後ろ指を差されているように感じるなど，対人関係の不安定さからくる理由を挙げる人が多かった．被害観念は，対人関係の問題から発生しやすくなるのかもしれない．

2）研究1でどんなストレスフルな出来事を体験したか？

5名中4名が平均得点（研究1－1）よりもストレッサー得点が高く，大学での友人関係や将来に関する不安を訴えていた．平均よりも低かった被験者では，得点こそ低いものの，泥棒に入られるといったかなりひどいストレス体験を報告していた．ストレッサーの測定に関しては量的測定もさることながら，質的測定を行う必要性があるだろう．

3）ストレスを強く感じている時により被害的になるのか？

5名中3名は，ストレッサーを体験することで被害的になりやすいことを自覚していると回答した．つまり，主観的報告からは被害観念の素因ストレスモデルが支持され，研究1の結果が確認された．

4）継続面接への参加を希望するか？

5名中4名が継続的な面接への参加を希望していた．参加希望の理由としては，「一人で考えることが多いので，面接を受けて自分に関して理解を深めたい」，「いろいろなアドバイスによって自分が改善されるならうれしい」というものが多かった．参加を希望しなかった被験者も1名いた．その理由は，「面接自体には参加してもかまわないが，アドバイスはいらない．自分は変わらないと思うので余計なお世話」というものであった．

5）過去にどんなストレスフルな出来事を体験したか？

5名中3名でいじめられた経験を話しており，なかでも重篤ないじめられ体験をもつ被験者は，「いじめられてから，人の言葉に過敏になった．相手の何気ない一言で自分が嫌われていると感じる」と報告しており，いじめられ体験が大学生になった今でも深刻な影響を与えていることがわかる．

考察

面接調査の結果，被害観念の高得点の被験者は，①強いストレス体験を持っていること，②過去にいじめられた体験を持っていること，③何らかの対人関係での問題を持っていることが多いこと，④ほとんどの被験者が継続的な面接への参加を希望していることなどがわかった．なかには，対人的な問題もさることながら，体

感異常などの幻覚類似体験で悩んでいる学生もおり，かなりの苦痛を感じていることを面接で報告していた．このようなケースは早急に介入することが望まれる。継続面接の意義はまさに早期発見・早期対処が可能であるところにある．今後，素因の得点が高い学生に対して，ストレスが高いときに被害的になりやすくなることを知らせるたり，ストレス対処法を指導していくような介入方法を具体的に考えていきたい．

2－2. 被害観念と過去のストレス体験（いじめ体験）との関連

面接調査において，過去のいじめ体験が被害観念の核となっている可能性が示唆された．いじめ体験は，現代の青年のメンタルヘルスにおいて深刻な問題となっている（丹野，1987，1996，1998；丹野・坂本，1994）．そこで，次にいじめ体験と被害観念の関係を調査してみることにした．

方法

大学生162名を対象に，被害観念尺度といじめについての調査をおこなった。森田（1986）を参考に，9種のいじめの手口を提示した。すなわち，①仲間はずれ，②無視，③しつこく悪口を言う，④持ち物を隠す，⑤いやがることを無理やりする，⑥たたく・ける・つねるなどの暴力，⑦プロレスごっこを口実になぐる，⑧脅す，金や物をとりあげる，⑨着ているものを脱がすである。それぞれについて，小・中・高時代の被害体験（いじめられた体験）・加害体験（いじめた体験）・見聞体験（誰かが，いじめている/いじめられている場面を見たり聞いたりした体験）の有無を尋ねた．

結果

1）いじめの体験率

それぞれの手口の加害・被害・見聞の体験率を表2に示す。この表を見ると，体験率が最も高いのは「仲間はずれ・無視」であり，被害体験が50%，加害体験が58%，見聞体験が90%に達している。また，下に行くほど，つまり形態がより悪質になるほど，体験率は低くなるが，それでも，「b心理的ふざけ型」の各手口では，20%から30%の学生が被害を受けたり，自分が加害者の側に回ったりしており，見聞率は60～70%にも達している。「c身体的いじめ型」といった暴力的ないじめや，「d身体的ふざけ型」といった陰湿ないじめについても，被害体験のある人が6～10%おり，加害体験は3～6%，見聞体験は28～47%もいる。つまり，悪質ないじめの手口も多くみられることを示している。

表2　いじめの大学生調査（数字は体験率%）

型[注1]	いじめの形態・手口	被害体験	加害体験	見聞体験
a）心理的いじめ型	仲間はずれ・無視	50	58	90
	しつこく悪口を言う	34	28	76
b）心理的ふざけ型	持ち物を隠す	34	20	70
	いやがることを無理やりする	33	25	68
	たたく・ける・つねるなどの小暴力	29	22	64
c）身体的いじめ型	プロレスごっこを口実に殴る	10	6	43
	おどす	10	6	47
	金や物をとりあげる	8	3	42
d）身体的ふざけ型	着ているものをぬがす	6	6	28

注1）「型」とは，森田ら（1986）がいじめの形態・手口を数量化Ⅲ類で類型化したもの。

2）偏相関係数

被害観念尺度といじめ体験の偏相関係数を求めた。まず，加害体験と見聞体験を統制した被害体験と被害観念との偏相関を求めると，有意な偏相関がみられた（$r=0.19$, $p<0.05$）．次に，被害体験と見聞体験を統制した加害体験と被害観念との偏相関を求めたが有意ではなかった（$r=0.008$, $p>0.10$）．さらに，被害体験と加害体験を統制した見聞体験と被害観念との偏相関を求めたが有意ではなかった（$r=0.03$, $p>0.10$）．以上から，大学生の被害観念と，小・中・高校でのいじめ被害体験は密接に関連することが示された。小・中・高校でのいじめの加害体験や見聞体験は大学生の被害観念とは関連がないことも明らかになった。

考察

小・中・高校でのいじめられた体験が大学生の被害観念を形成する要因となっている可能性がある．調査2－1の面接調査の報告を支持する結果である．しかし，逆に被害観念をもっているのでいじめられた体験を想起しやすくなっていた可能性も排除できない．この点に関しては，今後さらに検討していきたい．

3: まとめ

研究1では，被害観念と対人不安の素因ストレスモデルを検討し，被害観念では，4つの素因(ネガティブヒアリングボイス，聴覚の錯覚，怒り，恨み)，対人恐怖傾向では2つの素因(公的自己意識，自己に高い課題を課する傾向)とストレッサーとの交互作用が有意であった．つまり，これらの素因の強い人は，ストレッサーを体験することによって，より被害観念や対人恐怖傾向が強くなることが示された．

研究2では，面接調査を通じて，被害観念が強い人に心理的な介入が可能かどうかを検討し，心理的な面接を受けたいと大半の人が考えていることがわかった．また，面接の際に小・中・高校時代にいじめられた体験が自分の被害観念に関係しているという報告を得たので，いじめられた体験と被害観念の関係を検討した．その結果，両者の間には有意な正の偏相関が得られ，いじめられた体験と被害観念の間には，何らかの関連があるということが示唆された．

引用文献

Chadwick, P., Birchwood, M., & Trower, P. 1996 Cognitive Therapy for Delusions, Voices and Paranoia. New York : John Wiley & Sons.

Cohen, J., & Cohen, P. 1983 Applied multiple regression / Correlation analysis for the behavioral sciences (2nd ed.). New Jersey : Lawrence Erlbaum Assosiates.

Cloninger 1993 A psychobiological model of temperament and character. Archives of General Psychiatry, 44, 573-88.

Fenigstein, A. 1984 Self-consciousness and the overperception of self as a target. Journal of Personality and Social Psychology, 47, 860-870.

Feningstein, A.., Scheier, M..F.,& Buss, A..H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory . Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43, 522-527.

Fenigstein, A., & Vanable, P.A. 1992 Paranoia and self-consciousness. Journal of Personality and Social Psychology, 62, 129-138.

橋本剛 1997 大学生における対人ストレスイベント分類の試み．社会心理学研究, 13, 64-75

久田満・丹羽郁夫 1987 大学生の生活ストレッサー測定に関する研究．慶応大学大学院社会学研究科紀要, 27, 45-55.

木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 1996 Cloninger の気質と性格の 7 次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI), 精神科診断学, 7, 379－399.

Leary, M.R. 1983 Social anxiousness: The construct and its measurement. Journal of Personality Assessment, 147, 66-75.

森田洋司・清永賢二 1986 いじめ－教室の病い．金子書房.

中里克治・水口交信 1982 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成—女性を対象とした成績．心身医, 22, 108-112.

岡林尚子・生和秀敏 1991 対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究．広島大学総合科学部紀要, 15, 1-9.

Rawlings, D., & Freeman, J.L. 1996 A questionnair for the measurment of paranoia / suspisiousness. British Journal of Clinical Psychology, 35, 451-461.

Rosenberg,M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.

菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる２つの欲求について—. 心理学研究, 57, 134-140.

桜井茂男・大谷佳子 1997 “自己に求める完全全義”と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究, 68 , 179-186.

丹野義彦・石垣琢磨 1998 幻聴体験尺度作成の試み－健常者における幻聴の体験率とメカニズム－. Education Psychology Research Report, 31.

丹野義彦 1987 青年期における自己の発達とその障害. 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲（著）自己形成の心理学. 川島書店

丹野義彦 1996 律する－服装や髪型をめぐる教育臨床. 中島義明・神山進（編）人間行動学講座第１巻まとう－被服行動の心理学. 朝倉書店

丹野義彦 1998 いじめと人間. 中島義明・太田裕彦（編）フロンティア人間科学'９８. 放送大学教育振興会.

丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 2000 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成. 心理学研究, 71, 379-386.

丹野義彦・坂本真士 1994 大学生のいじめに関する認知. 東京大学教養学部学生相談所報告 2：27-31.

丹野義彦・坂本真士 2001 自分のこころから読む臨床心理学入門. 東京大学出版会.

渡辺政次 1997 ストレスに対する認知的評価とコーピング. 東京大学教養学部 1996 年度卒業論文

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.